

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 20 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 年～2011 年

課題番号：20520259

研究課題名（和文）アメリカ独立・建国神話の構築と南北戦争以前期の大衆文化受容との関連
についての研究研究課題名（英文）Nation (Re)Building through Popular Literature: The Myths of the
American Revolution and the Cultural Dissemination of
Antebellum Sensational/Sentimental Narratives

研究代表者

白川 恵子（SHIRAKAWA KEIKO）

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：10388035

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ建国神話、共和政期、アンテベラム期、大衆文化受容、ロマンス

1. 研究計画の概要

本研究は、アメリカ独立革命期の建国神話がいかに構築され、それが共和政期および、その後の南北戦争以前期（文学史上のアメリカ・ルネサンス期と重なる）の文化の中で、いかに表象され、受容されてきたのかを考察するものである。

そもそも体制転覆の最たる事例であるところのアメリカ独立（および戦争）が、英雄的後期に読み替えられるためには、神話や英雄像の構築が必要であった。宗主国の君主の暴行を列挙して反逆の正当性を訴え、新国家のために新たな父親像を提示するためには、いかなるレトリックが駆使され、またそれは、どのように民衆に受容されていったのか。そして領土拡大と人種問題の顕現化により、建国期の矛盾が暴かれ、連邦崩壊の危機を迎えたアンテベラム期において、それ以前（共和政期後期）までに生成された神話どのような影響をもたらしたのかを考察するのが、本研究の意図するところである。

従って、本研究は、四年間で、アメリカの「起源」である独立革命期の建国神話や英雄物語を、「再生」を意味するアメリカ・ルネサンスの時代から捉え直すとともに、建国期に隠蔽された政治的矛盾を、アメリカがいかに国民的「合意」へと読み替え、そうした国家建国の理想と矛盾が、当時の文学にいかに反映され、また関連しているのかを明らかにすることを目標とする。端的に言えば、アメリカ文化・アメリカ文学内部に潜在する建国神話の理想や矛盾を、多角的に検討・追求するのが、本研究の目的であり意義である。

さらに本研究においては、こうした考察家庭で、従来の文学史、文学批評しにおいて、

あまり注目されず、分析対象となつてこなかった作品の発掘・紹介も試みる。単に読み捨てられ、忘れ去れた大衆作家作品を見出すばかりではなく、キャンノン作家の埋もれた名作を取り上げることによって、共和政期以降の大衆文化受容をより鮮明に示すとともに、アメリカ文学史・批評史の再構築にも貢献したい。

2. 研究の進捗状況

上記研究概要に対して、これまでの4年間に、(1)ワシントン伝の構築と散布、(2)国璽制定プロセスと領土拡大に伴うアメリカ建国神話と先住民との関係、(3)南北戦争前期の都市発展から見る建国の理念の矛盾、(4)環大西洋的視座から見たアメリカ独立と神話構築への再評価、(5)共和政期における親英意識の表象と糊塗といったテーマを、様々な作家作品や歴史的、文化的事象の背後に見出し、指摘してきた。

現在進行中の論考としては、(6)アメリカ独立が明示した抵抗・反逆精神の発露が、個人的および組織的レベルでどのような歴史的、文化的、文学的事象となり顕現化するのかについて、いくつかの自伝・伝記とともにシェーズの反乱、南部奴隷反乱、ジョン・ブラウンの蜂起などの中を探る試み、および、(7)共和政期、アメリカ近海を舞台とした海洋物語ジャンル生成とそれが建国神話に及ぼした（構築的・脱構築的）影響を探る試みの二点に取り組んでいる。

より具体的には、スティーヴン・バロウズの『回想録』に見出せる権威への抵抗と争奪を、独立宣言のなぞりであると想定し、エドワード・ベラミーによるシェーズ反乱に関す

るロマンスをも射程に入れながら、そのスプリングフィールド・コネクションによって、ジョン・ブラウンへと接続させる論考の構築を目指す。さらに、クーパー作品における独立革命三部作のみならず、中後期作品群中からも文学史上黙殺されていたテキストを掘りおこす。

こうした考察にプラスして、これまでの研究成果と合わせて全体的な総括を行い、それを出版可能な統合的テキストとなるよう推敲作業もあわせて行う。

3. 現在までの達成度

②概ね順調に進展している。

当初想定していた研究内容以上の考察の広がりが見られたため、いくつかの発表論文のテーマ的枠組みが広がっているものの、基本的には、順調に、成果を発表できていると考える。

4. 今後の研究の推進方策

まず、本研究終了までの、短期的な方策としては、前述および後記の成果に関して、ジャンル論および年代順別の網羅的配置について再吟味する。すなわち、これらの論考のまとまりが、アメリカ文学史通史の中に位置づけられる有機体の一部として、いかなる意義を有するのかを再検討し、その作業を経たのち、単著としての出版を目指す。

また、本研究期間終了後の中長期的な方策としては、前述2.(6)、(7)のテーマをさらに発展敷衍させ、複数の作家作品研究とも連動させる。

いずれにしても、特定個々の作家研究および、局所的な地域研究を超えた、文学史、文化史の再評価に直接的、間接的に繋がるような、学際的視点からの論考を目指す。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

① 白川恵子 “The American Eagle and Bird Woman: Early America’s Nation Building and Its Native American Policy.” 『同志社大学英語英文学研究』第88号、1-57頁、2011年3月、査読有。

② 林以知郎 「亡霊と痕跡—クーパーの *Lionel Lincoln* とスパイ・アンドレ伝承」『同志社アメリカ研究』第46号、35-60頁、2010年3月、査読有。

③ 林以知郎 「祝祭と憑在—建国期アメリカ文化と異人たちの帰還」『北海道アメリカ文学』第25号、1-15頁、2009年3月、査読無。

〔学会発表〕(計4件)

① 白川恵子 「ルイザ・メイ・オルコットの煽情物語—奴隷制・人種表象を中心に」日本ソロー学会、2010年度全国大会、2010年10月、於：青山学院大学。

② 白川恵子 「遺産相続の物語—George Lippard の都市犯罪ミステリ *The Empire City*(1849) と *New York: Its Upper Ten and Lower Million*(1853)」関西アメリカ文学界例会、2009年7月、於：京都外国語大学。

③ 林以知郎 「祝祭と憑在—建国期アメリカ文化と異人たちの帰還」日本アメリカ文学会北海道支部大会、2008年12月、於：北海学園大学。

④ 白川恵子 「メイソン・ロック・ウィームズの『ワシントン伝』再考」日本英文学会第80回全国大会、2008年5月、於：広島大学。

〔図書〕(計5件)

① 白川恵子 『アメリカ—<都市>の文化学』ミネルヴァ書房、「帝都の物語—フォスター、トムソン、リップパードにおけるアンテベラム・ニューヨーク」を執筆、17-51頁、2011年3月。

② 白川恵子 『バード・イメージ—鳥のアメリカ文学』金星堂、「アメリカン・イーグルとバード・ウーマン—初期アメリカの国家形成と先住民政策」を執筆、17-42頁、2010年3月。

③ 白川恵子 『シグニファイイング・モンキー—もの騙る猿／アフロ・アメリカン文学批評理論』(ヘンリー・ゲイツ・ジュニア著)、南雲堂フェニックス、初めに、序章(7-29頁)を翻訳、2009年12月。

④ 白川恵子 『独立の時代—アメリカ古典文学は語る』世界思想社、「売れる偉勲・憂うる遺訓—ウィームズの『ワシントン伝』再考」を執筆、29-58頁、2009年6月。

⑤ 林以知郎 『独立の時代—アメリカ古典文学は語る』世界思想社、「『開拓者たち』と家系譜の書き換え—上機嫌な時代の自己意識的なアメリカニズム」を執筆、59-82頁、2009年6月。